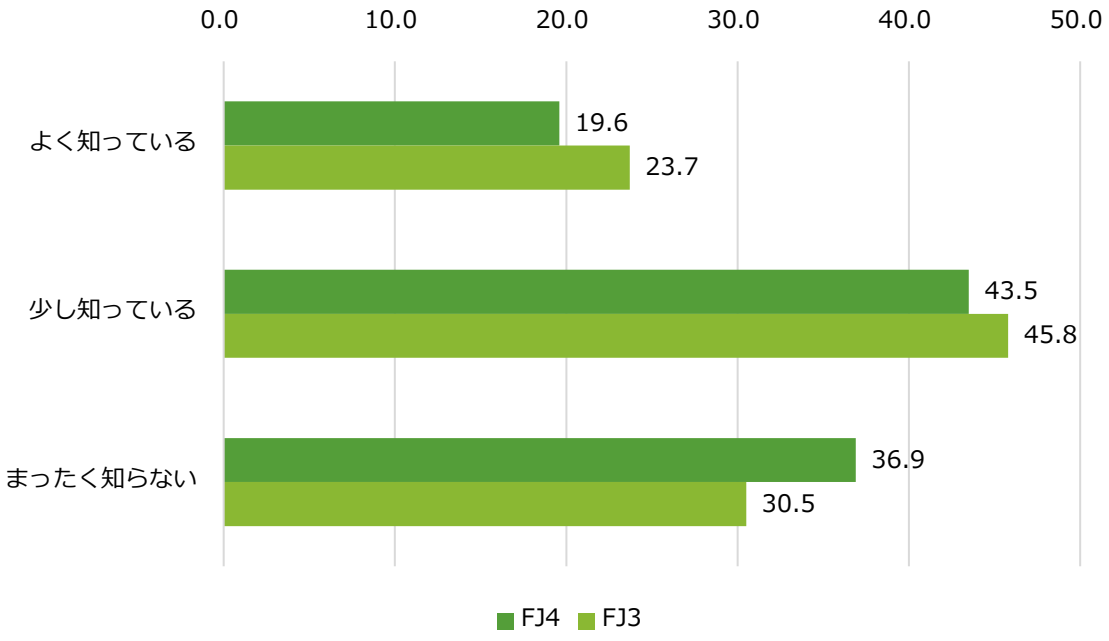
6. 子どもを持つこと

■子どもの持ち方について、どれくらい知っている？

HIV 陽性者が子どもを持つための方法についてどれくらい知っているかを尋ねたところ、「よく知っている」19.6%（159 人）、「少し知っている」43.5%（352 人）で、合計約 63%の方が知っていると回答しました。

一方で、「まったく知らない」と答えた方は 36.9%（299 人）にのぼります。これは FJ3 の 30.5%から約 6 ポイント増加しており、情報が十分に届いていない方が増えている点は課題といえます。HIV 陽性者が子どもを持つための方法（人工授精や体外受精など）に関する情報の普及が引き続き重要です。

図 6-1　子どもの持ち方についての認知割合（%）



FJ4: N=810　FJ3: N=908

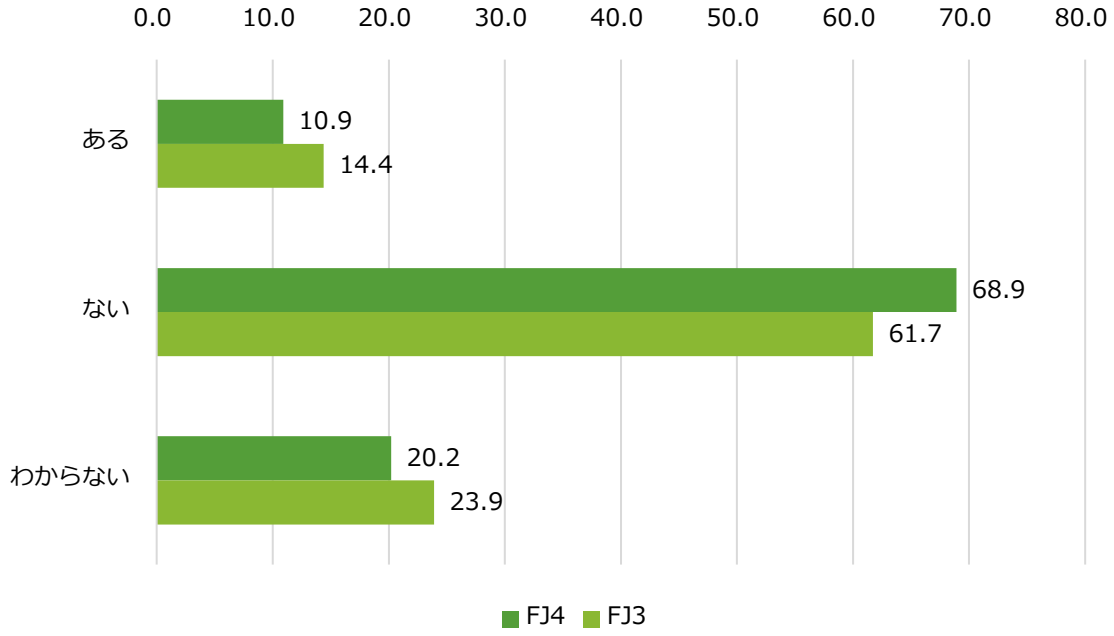
■HIV 陽性を理由に子どもをあきらめた経験（概要・理由）

あきらめた経験の概要

HIV 陽性であることを理由に子どもをあきらめた経験を尋ねたところ、「ある」と答えた方は 10.9%（88 人）でした。「ない」は 68.9%（558 人）、「わからない」は 20.2%（164 人）です。

前回 FJ3 と比べると、「ある」は 14.4%から 10.9%へと 3.5 ポイント減少し、「ない」は 61.7%から 68.9%へと 7.2 ポイント増加しました。HIV 陽性であることを理由に子どもをあきらめる方が減ってきている傾向が見られ、医療の進歩などが影響している可能性があります。

図 6-2　HIV 陽性を理由に子どもをあきらめた経験の割合（%）



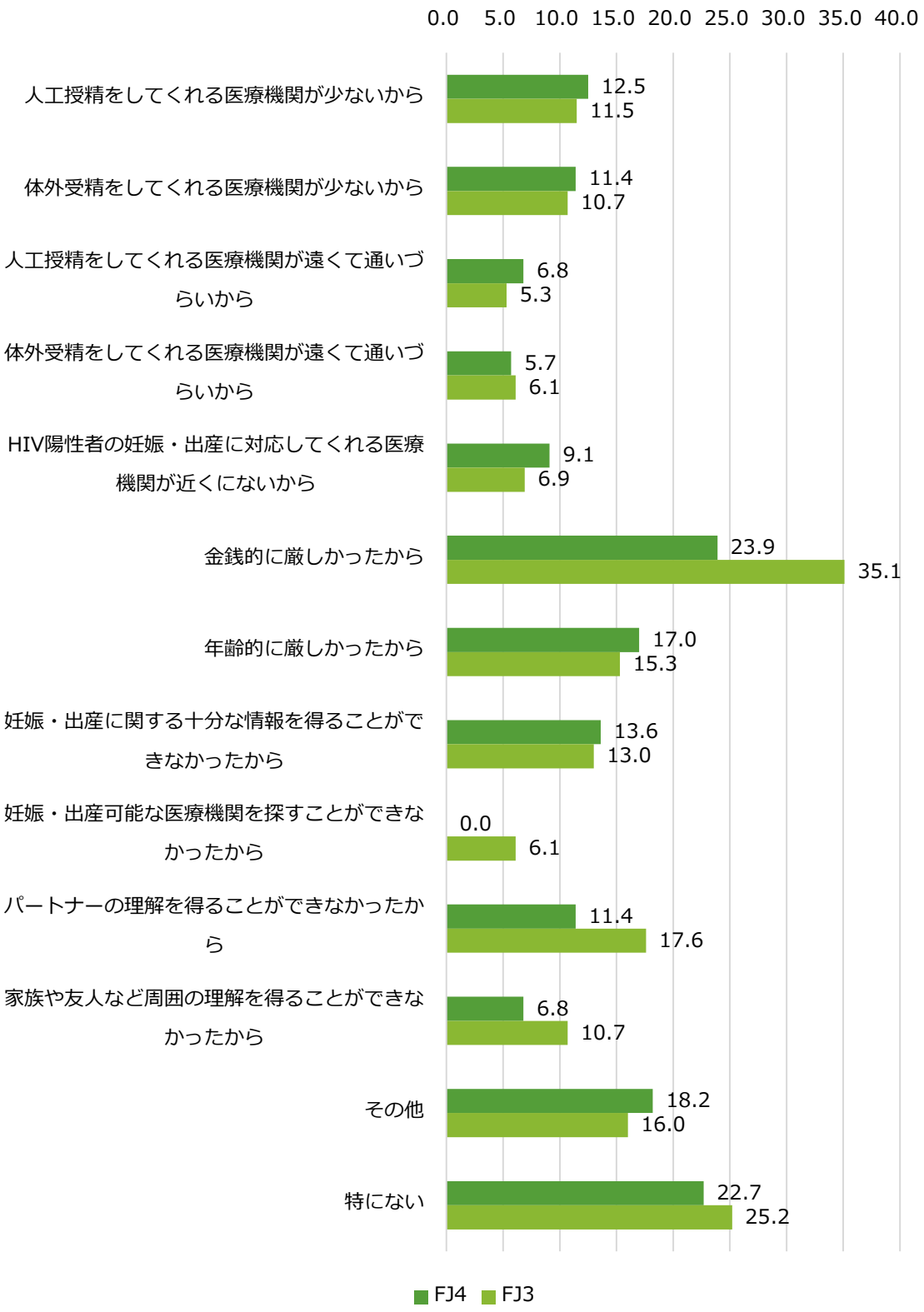
FJ4: N=810　FJ3: N=908

あきらめた理由（複数回答）

子どもをあきらめた経験のある 88 人（FJ4）の複数回答です。最も多かった理由は「金銭的に厳しかったから」で 23.9%（21 人）でした。次いで「年齢的に厳しかったから」が 17.0%(15 人)、「妊娠・出産に関する十分な情報を得ることができなかったから」が 13.6%（12 人）です。

医療機関の少なさや遠さも挙げられており、アクセス面での課題も残っています。前回 FJ3 では「金銭的に厳しかったから」が 35.1%と最多で、今回は比率が下がっていますが、依然として経済的・情報的なサポートの必要性が示されています。

図 6-3　あきらめた理由（複数回答，%）



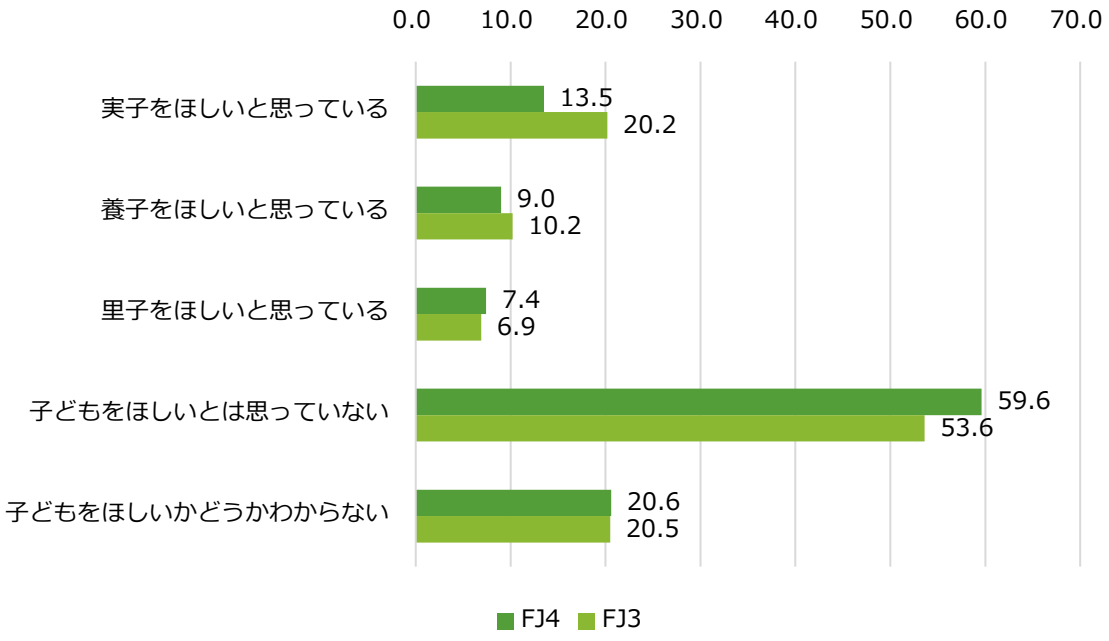
FJ4: N=88（子どもをあきらめた経験のある方）　FJ3: N=131

■子どもをほしいと思っているか

子どもをほしいと思っているかを複数回答で尋ねたところ、「子どもをほしいとは思っていない」が最多で 59.6%（483 人）でした。「子どもをほしいかどうかわからない」は 20.6%（167 人）です。

一方、何らかの形で子どもを望む人として、「実子をほしいと思っている」が 13.5%（109 人）、「養子をほしいと思っている」が 9.0%（73 人）、「里子をほしいと思っている」が 7.4%（60 人）でした。実子・養子・里子のいずれかを望む回答は、すべてを単純に足すと 242 人（29.9%）となり、一定数の方が子どもを持つ可能性を考えていることがわかります。前回 FJ3 と比べると、実子を望む方は 20.2%から 13.5%に減少しており、希望者数の変化にも注目が必要です。

図 6-4　子どもをほしいと思っているかの割合（複数回答，%）



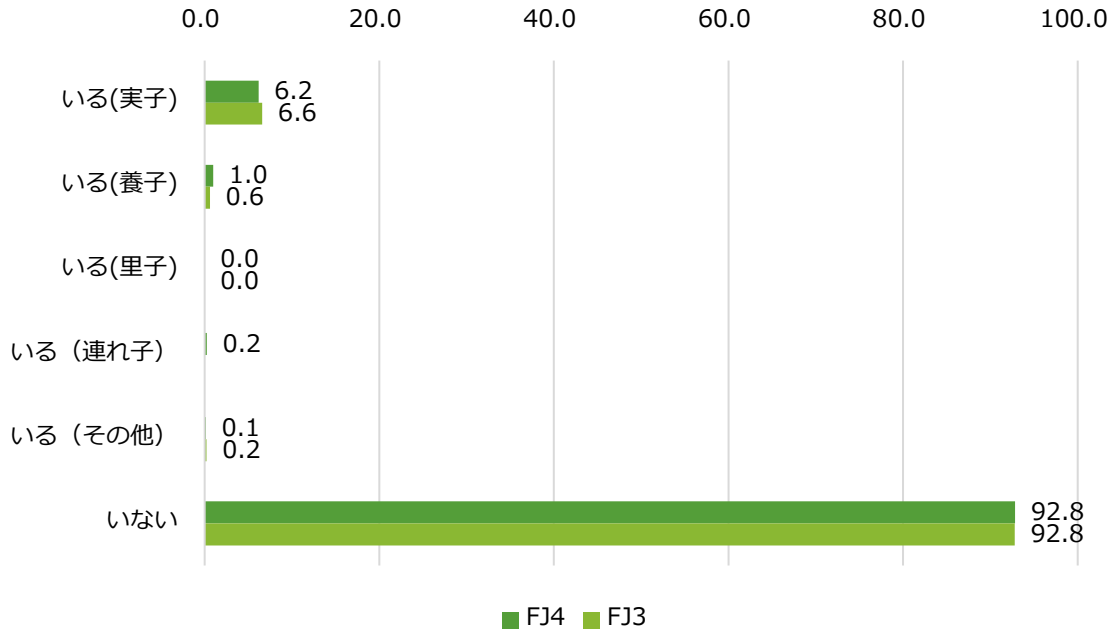
FJ4: N=810　FJ3: N=908

■現在、子どもはいるか（有無・同居者・苦労）

子どもの有無

回答者 810 人中、実子がいる方は 6.2%（50 人）、養子は 1.0%（8 人）、連れ子は 0.2%（2 人）、その他は 0.1%（1 人）で、子どものいない方は 92.8%（752 人）でした。

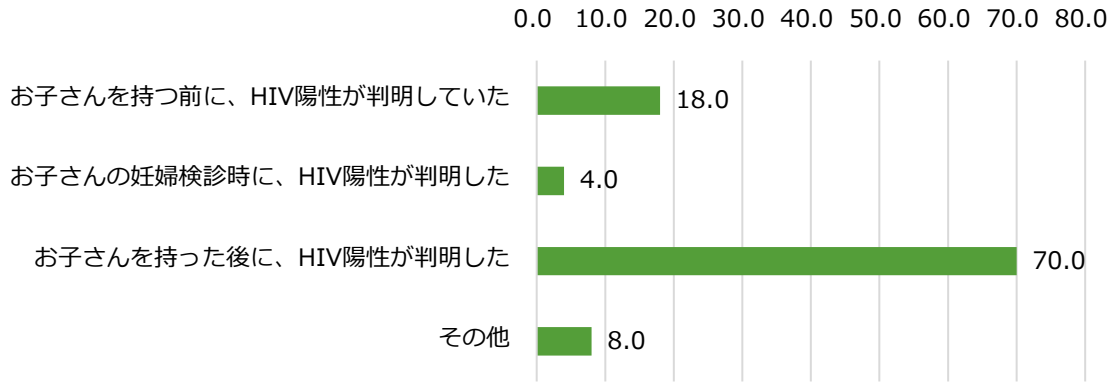
図 6-5　子どもの有無の割合（複数回答，%）



FJ4: N=810　FJ3: N=908

実子のいる 50 人の内訳を見ると、子どもを持った後に HIV 陽性が判明した方が 70.0%（35 人）、子どもを持つ前に HIV 陽性が判明した方が 18.0%（9 人）、妊婦検診で HIV 陽性が判明した方が 4.0%（2 人）でした。つまり、多くの方が HIV 陽性と知る前に子どもを持っていたことがわかります。妊娠方法は自然妊娠が 86.0%（43 人）、体外受精が 14.0%（7 人）でした。

図 6-6　子どもを持った時期(%)



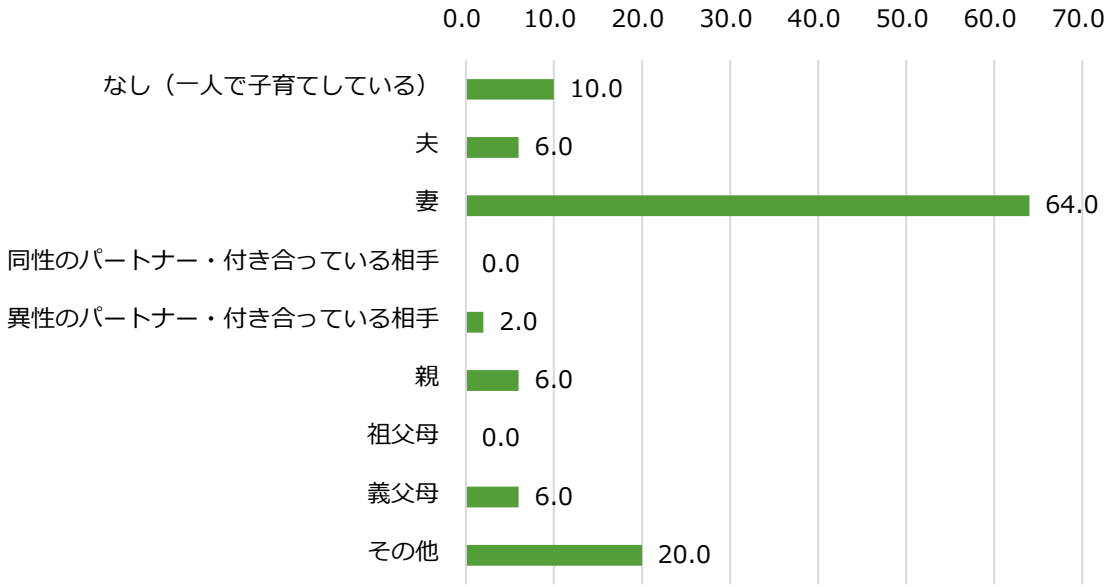
FJ4: N=50（実子のいる方）

子育てを一緒に行っているのは

実子のいる 50 人の回答です。最も多いのは「妻と一緒に子育てをしている」で 64.0%（32 人）でした。次いで「その他」が 20.0%（10 人）です。一人で子育てをしている方も 10.0%（5 人）います。

「その他」には、既に独立した子どもがいる場合や、元パートナーと一緒に子育てをしているなど、多様なケースが含まれています。HIV 陽性者の子育て環境が多様であることが示されており、それぞれの状況に応じたサポートの重要性がわかります。

図 6-7　子育てを一緒に行っている方（複数回答，%）



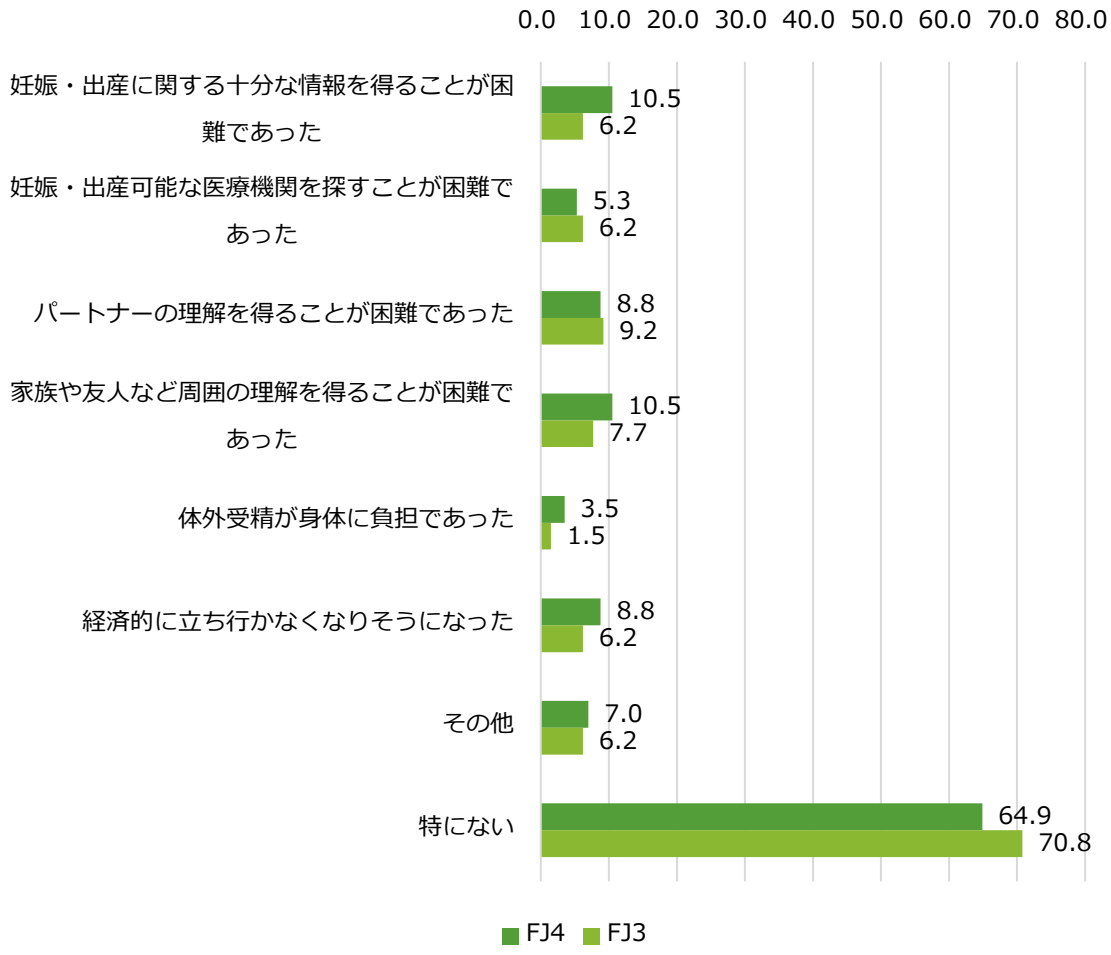
FJ4: N=50（実子のいる方）

子どもを持つと決めるにあたって苦労したこと

子どもがいる 57 人の複数回答です。「特にない」が最多で 64.9%（37 人）でした。つまり、多くの方が子どもを持つと決めるにあたっての苦労は特にありませんでした。

苦労した点として挙げられた上位項目は、図 6-8 に示すように、妊娠・出産に関する情報を得ることが困難 10.5%（6 人）、家族や友人など周囲の理解を得ることが困難 10.5%（6 人）、パートナーの理解を得ることが困難 8.8%（5 人）、経済的に立ち行かなくなりそうになった 8.8%（5 人）でした。前回 FJ3（n=65）と比較しても大きな変化はなく、情報・周囲の理解・経済面での課題が一定程度続いています。

図 6-8　子どもを持つと決めるにあたって苦労した内容（複数回答）



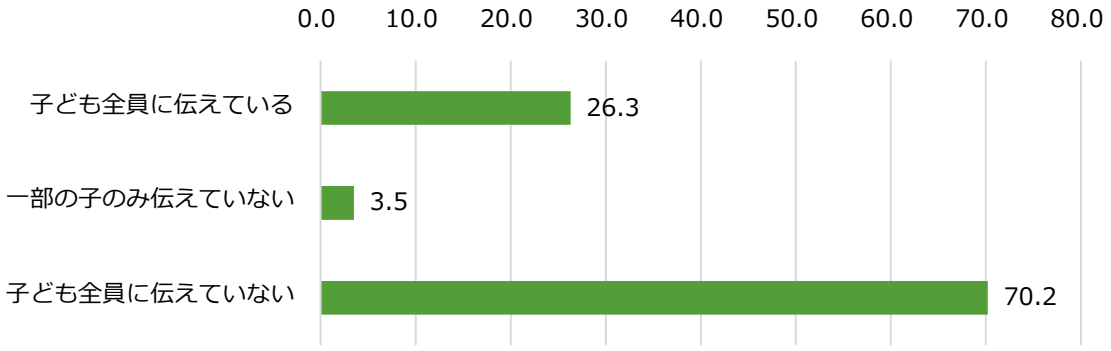
FJ4：N=57（子どものいる方）　FJ3：N=65

■子どもに HIV 陽性について伝えているか

子どもに親の HIV 陽性について伝えているかを尋ねたところ、子どものいる 57 人のうち、全員に伝えている方は 26.3%（15 人）、一部の子のみ伝えていない方は 3.5%（2 人）、全員に伝えていない方は 70.2%（40 人）でした。約 7 割の方が子どもには伝えていない状況です。

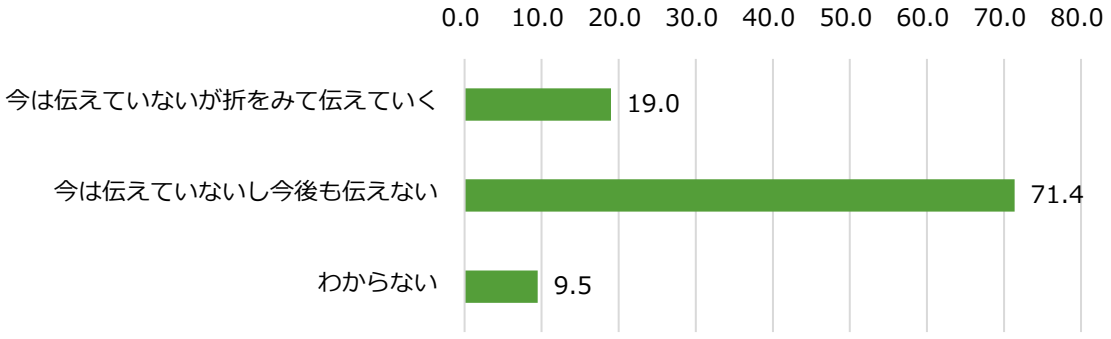
一部の子のみ/全員に伝えていない 42 人に今後の予定を聞いたところ、「折をみて伝えていく」19.0%（8 人）、「今後も伝えない」71.4%（30 人）、「わからない」9.5%（4 人）でした。伝えていない方の約 71%が今後も伝えない予定と回答しており、子どもへの告知については、多くの方が慎重な立場を取っていることがわかります。どのように向き合うかについてのサポートや情報提供が求められます。

図 6-9-1　子どもに親が HIV 陽性であることを伝えているか



FJ4: N=57（子どものいる方）

図 6-9-2　今後の予定



FJ4: N=42（伝えていない方）

■必要なサポート・情報について

子どもを持つにあたって必要なサポート・情報について、現在子どものいない 752 人が「必要」と回答した項目（図 6-10）の上位 10 項目です。1 位は「医療従事者からのサポート」28.1%（211 人）、2 位は「パートナーからのサポート」25.8%（194 人）、3 位は「子どもへの HIV 感染についての情報」21.4%（161 人）でした。

以下、4 位「男性が HIV 陽性の場合のウイルス分離術と体外受精についての情報」15.0%（113 人）、5 位「子どもが HIV 陽性だった場合の治療・予後についての情報」14.1%（106 人）、6 位「HIV 支援団体のスタッフ・ボランティアからのサポート」13.0%（98 人）、7 位「抗 HIV 薬と児の障がいについての情報」12.9%（97 人）、8 位「子どもに親が HIV 陽性であることをどう伝えるのかについての情報」11.6%（87 人）、9 位「実子以外の子どもを持つ方法（養子・里子の制度など）についての情報」11.2%（84 人）、10 位「結婚についての情報」10.4%（78 人）と続きます。医療従事者やパートナーからのサポート、そして感染や医療に関する具体的な情報へのニーズが高いことがわかります。

図 6-10　子どもを持つにあたって必要なサポート・情報（複数回答, n=752）



FJ4：N=752（子どものいない方）　FJ3：N=843